

十和田湖は「三恩人」とされる大町桂月、武田千代三郎、小笠原耕一によって全国的に有名になったと言われている。中でも桂月は、雑誌『太陽』に紀行文を掲載し、湖を世に知らしめた最大の功労者として語り継がれている。しかし十和田湖は桂月の筆だけで有名になつたのではない。武田は青森県知事の立場から十和田保勝会を立ち上げた。保勝会は観光客の便益をはかり、宿泊施設や遊覧船を経営するなど、組織的な活動で湖の知名度向上に大きく貢献した。湖のた



乙女の像の前で記念撮影する人々。  
1968（昭和43）年11月8日・青森県史編さん資料）

めに組織と資金力を活用した武田の役割は大きい。武田は自ら『十和田湖』を著し、綿密な実地踏査と鋭い鑑賞力で湖の魅力を写真と文章で表現した。そして遊覧船による「湖上遊覧」こそ、最も湖の美しさを堪能できると主張している。彼の書いた『十和田湖』は、今日数多く存在する十和田湖のガイドやパンフレットの「原典」といえる。

就する。湖が有名になる過程は、地域振興の実現過程と同じである。

3恩人の小笠原と同じ名を有する小笠原松次郎は、旅館湖畔荘を経営する傍ら、「臥雲仙人」の号を持ち、新聞や雑誌で十和田湖を宣伝し観光開発を推進した。桂月が来青した際は、十和田湖や八甲田山などを案内し、現場から魅力を紹介し続けた。3恩人の偉大さを随所で紹介したのも彼である。このため松次郎は「十和田の主」と言われた。

## 十和田湖を有名にした“5恩人”

中園 裕

（県民生活文化課 県史編さんグループ主幹）

るものだ。

法奥沢村（現十和田市）の村長だった小笠原耕一は、地元人を組織し、武田と呼応して十和田湖のために尽くした。武田が知事の権力を駆使して活動しても、地元が協力せねば効果を生まない。武田の名誉と功績も、小笠原の活躍なしには成立しなかった。上からの指示と権力、それに下からの支えと協力があつて物事は成

つまり「湖景鳥瞰」が十和田湖の魅力であると強調した。有名な展望台である「瞰湖台」を世間に知らしめたのも彼である。十和田湖といえば遊覧船と展望台が有名だが、いずれも武田や松次郎が主張したことに端を発している。

十和田湖を語る上で忘れてはならない人物が和井内貞行である。莫大な資金と年月をかけてヒメマス養殖

松次郎は高台からの湖展望、

青森県で功績を評価されるが、秋田県ではそうでもない。和井内は秋田県で絶賛されるが、青森県では語られることが少ない。松次郎も同様だ。県境争いは人物の評価にも影響を及ぼしているのである。

乙女の像は十和田湖の3恩人を顕彰するための像である。しかし3恩人に加え、湖のために命をかけた2人の人物についても関心を

持つて欲しい。十和田湖は青森・秋田両県にとって等しく大切な存在だ。湖のために尽くした人々の活動と情熱は、県という枠組みを超えて評価されるべきものと思う。

端を発している。

十和田湖を語る上で忘れてはならない人物が和井内貞行である。莫大な資金と年月をかけてヒメマス養殖

に取組んだことは有名だ。それ以外にも日露戦後に流行した絵葉書を活用し、養魚の生産と湖の観光宣伝に大きく貢献した。湖沼学者の田中阿歌磨に湖を調査させ、科学の観点から湖の価値を世間に広めた功績も無視できない。

十和田湖には長い間、青森・秋田両県による県境争いがあった。それゆえ湖の「恩人」に対する見方も両県で相違に異なる。桂月は青森県で功績を評価されるが、秋田県ではそうでもない。和井内は秋田県で絶賛されるが、青森県では語られることが少ない。松次郎も同様だ。県境争いは人物の評価にも影響を及ぼしているのである。